

平成27年度 外国人留学生 小論文 出題の意図と解答の傾向

【出題の意図】

『「幸せ」の経済学』（橘木俊詔 岩波現代全書 2013）からの出題である。本学に入学する前に、日本語能力を高めるだけではなく、経済学への興味、関心も深めておいてほしいと考え、この文章を入学試験の問題として採用するに至った。

設問にあたっては、これから本学の経済学部で学ぶにあたって必要とされる（第二言語としての）日本語能力、文章読解能力、文章表現能力、論理的思考力に加え、経済学への関心を測ることに重点を置いた。

設問1では、日本語の教材に現れやすい漢字とともに、日本語の教材には現れにくい本学で学ぼうとする学生には読めてほしいと思う漢字も取り上げた。設問2、問3では、理解した文章を再構成する力を測った。設問4では、それに加え、経済学への関心についても測った。設問5では、本文を理解した上で、論理的に文章が書けるか、自分の意見を明確に表現できるか、そして、経済学と向き合う準備ができているかを問うこととした。

【回答の傾向】

<全体的な傾向>

全体的に理解の差が大きく表れた。理解できた受験者はすべての設問を通して高得点となっていた。

自動詞と他動詞の混用、片仮名表記の間違い、助詞の間違いが多く見られた。文体が統一できていない受験者もいた。中国語を母語とする受験者には、簡体字や単語レベルでの中国語の使用も見られた。字数制限のある設問では、制限を超えてしまう受験者、または著しく字数の少ない受験者もいた。

問題1

<設問1>

①、②、③は比較的正答率が高かった。④、⑤の正答率は非常に低かった。

<設問2>

用語を説明する問題であるため、「こと」や「状態」を末尾に用いる解答を期待したが、多くの受験者においてそれができていなかった。「ゼロ成長」に関する記述はよくできていたが、その根底に資源の制約があるということに関する記述のない解答が少なからず見られた。

<設問3>

(B)の直前の文をまとめることに加え、(B)のすぐ後の段落の内容等をうまく補足的に用い、自分の言葉で再構築できている場合に高く評価した。この問題の解答には全体を通しての内容理解も求められ、それができていない受験者には内容を自分の言葉で再構築することは難しかったようである。

<設問4>

「サルコジ委員会」に関する文章の読解能力と経済学への興味、関心を問う問題である。語を書く設問であるにもかかわらず、記号を書いている受験者が若干名見られた。また一つの空欄に一つの語を入れることを期待したが、一つの空欄に二語、三語入れている受験者も見られ、全体的に正答率が低かった。

<設問5>

小論文対策をしっかりやってきた上で受験しているのだと感じられたが、それまでに書いたことがあるのであろう類似したテーマの小論文にとらわれ、今回の設問において、論点がずれてしまったもの、オリジナリティーが十分に発揮されないものもあった。

また、本文の理解が十分でなかったため、しっかりとした論述ができなかったと思われる受験者もいた。本文の引用が多すぎる受験者、自分の立場が明確に表現できず相反する意見が混在している受験者も見られた。内容に加え、文章の構成、論の展開といった点にも重点を置いて採点を行った。深く細部まで読み取り、考えることができた受験者、自分の考えを明確にして論理的な展開ができた受験者を高く評価した。

日本語だけでなく、自分の持てる知識を活用し、自分の考えを明らかにしなければならぬ問題であり、日本語の学習を単なる言語の学習と捉えてやっていただけではなかなか解けない問題である。日々の生活の中で、様々なことに興味を持ち、自ら考える力を養うことが望まれる。